交差箱のハーモニー

ディゴッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交差箱のハーモニー

【Ｎコード】
Ｎ７５８５Ｘ

【作者名】
ディゴッド

【あらすじ】
この箱は様々な物が入り交じり、色々な音色を奏でている……。

とまぁシリアスな発言は置いておき、これは私が考えた小説のネタと短編小説倉庫です。
小説ネタの内容は、クロスオーバーや原作ブレイクものなど多種多様なものです。
あくまでネタの草案ですので、設定の甘さもありますがその部分は優しく見守ってください。

後、このネタを使ってみたいとか言うのがあれば感想覧に、“このネタを使いたいのですが”と言う事を書いてくれれば、どうぞ使っても構いません。もしかしたら稀な確率で、たまに続きを書いたりしているかもしれません。
尚、独立した場合は此処に載ってあるのは削除します。（其処の理解も宜しくお願い致します。）

また先程も言いましたが、小説のネタ以外にもふと思い付いた短編小説も掲載する予定です。（その際には、前書きにも“この作品は短編小説です”と明記しておきます。）

初心者ではありますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

この作品に関する説明

これは私が考えた小説のネタと短編小説倉庫です。

小説ネタの内容は、クロスオーバーやオリ主ものなど多種多様なものです。

あくまでネタの草案ですので、設定の甘さもありますがその部分は優しく見守ってください。

後、このネタを使ってみたいとか言うのがあれば感想覧に、“このネタを使いたいのですが”と言う事を書いてくれれば、どうぞ使っても構いません。もしかしたら稀な確率で、たまに続きを書いたりしているかもしれません。

尚、独立した場合は此処に載ってあるのは削除します。（其処の理解も宜しくお願い致します。）

また先程も言いましたが、小説のネタ以外にもふと思い付いた短編小説も掲載する予定です。（その際には、前書きにも“この作品は短編小説です”と明記しておきます。）

初心者ではありますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

心に残っていたのは、永遠に届くことのない貴方への想い。（ガンダムＯＯ

今回２回目の投稿です。

今回はふと思い付いたガンダムＯＯの短編小説で、内容は２ｎｄの２０話後のリヴァイヴとヒリングの話です。

尚、この話には若干のリヴァアニュの要素もあります。

心に残っていたのは、永遠に届くことのない貴方への想い。（ガンダムＯＯ

「まさかアニューがやられるなんてね…」

「愚かな奴だ。人間なんかと恋に堕ちるから命を落とすのだ」

口ではそう言っているものの、私の心の中の言い表せない何かは消える事は無かった。

「リヴァイヴ…そう言って割には何でさっきから泣いてんのよ」

泣いてる？

私があんな愚かな片割れの為に？

そう言って頬を触るとーーーー

「え…」

その手に付いていたのは冷たい涙の雫。

どうして？

なぜ涙が溢れてくるんだ？

最初はわからなかったが、暫くしてその理由がわかった。

あぁそうか。

私は好きだったんだ。

彼女のーーーー

アニュー・リターナーの事がこの世界中の誰よりも好きだったんだ。

そして、その彼女はもうこの世にいない。

それが悲しいから私は泣いているんだ。

「ハハハ……ハハハハハ…アニュー…アニューウウウウウ…」

何て滑稽な事だろう。

失ってから彼女へのこの気持ちに気付くなんて。

本当は自分自身でも分かっていた。

でも認めたくなかった。

彼女があんな奴の手を取ったのをが悔しかったから。

だから彼女にあんな冷淡にしか相手をしなかった。

アニュー

出来る事ならあって謝りたい。

そしてこの気持ちを伝えたかった。

だけど彼女はもういない。

私の心にあったのはもう届かない彼女への想いだけだった。

心に残っていたのは、永遠に届くことのない貴方への想い。（ガンダムＯＯ

ＯＯのセカンドシーズンの２０話と２１話を見ていて、「アニューが亡くなった時のイノベイダー側（特にリヴァイヴ）の様子」が頭に浮かんだので唐突に書きました。

私の中のリヴァイヴは仲間想いな感じで、２０話でアニューに対してあんな冷淡だったのは作戦の失敗もそうだけど、本当は心の何処かでライルにアニューを取られたのが嫌でその現実を認めたくなかったのではと言うイメージです。

正直、口調に関してはアニメを見ていたので覚えてはいますが、上手く表現できたかは自分でも正直分かりません。

此処まで読んでくれて大変有難う御座いました。

とある少女の探偵観察（ＵＮ－ＧＯ　新十郎←梨江）（前書き）

どうもこんばんは。

今回の作品は、タイトルからお察しの通りＵＮ－ＧＯの作品で、話は殆ど梨江の視点で語られています。

今秋アニメのＳＳを書くのは私自身初めてなので、面白いかは解りませんが、温かく見守ってください。

とある少女の探偵観察（ＵＮ－ＧＯ　新十郎←梨江）

初めの印象は一言で言えば“変人”。

ただそれだけだった。

お父様の事を愚弄したかと思えば、パーティーで周りの客に囲まれた私を助けただけでなく加納会長に取り入ろうしたり、全く訳の分からない人だった。

「敗戦探偵さんの出番はありませんから！」

挙げ句の果てにお父様の推理にケチを付けた時は、さすがに我慢の限界だった。

だけど、特別室で奥様の目の前で推理を語る姿を見た時は、自分の中であの人に対する何かが変わった。

「人間は堕落する。それは…聖女も英雄も止められない。それが…救いだ」

あぁ、そうか。

この時、私は彼の本当の姿を見えた様に思えた。

彼はあんな風に冷めた言い方をしているけど、本当は“誰もが幸せになれるように”と言うただ一つの想いを胸に事件を解決し、自ら汚れ役となる人なのだ。

そう思うと、私の中で彼の印象が変わっていった。

「美しい物を美しく終わらせる…俺達には縁のない話だ。堕ちている途中なんでね」

去り際の彼の言葉には、不思議と彼とはまた会えそうな予感が感じられた。

「結城新十郎……か」

その時私の脳裏には、彼の名前と去り際に言い残したあの台詞が何度も巡り回っていた。

とある少女の探偵観察（ＵＮ－ＧＯ　新十郎↑梨江）（後書き）

初めてのＵＮ－ＧＯ小説でした。

正直初めてだったので、何度も書き直した結果、あの様な作品になりました。

梨江の気持ちの中には、１話を見て私が思った新十郎の印象の考えも若干有り、書いていて“小説じゃない様な気が…”と考えてしまって戸惑ってしまい、書き終わった今でも、“こんな感じで良かったのかな？”と思ってしまいます。

正直、感想を書いてくれる人がいたら嬉しいです。

８ａｆｔｅｒ（ｕｎ－ｇｏ　新十郎×因果）（前書き）

久し振りのｕｎ－ｇｏ小説第２弾！

今回の話は新十郎と因果の話。

時間的に言えば、８話の後の設定です。

私の中ではこんな事があってもおかしくは無いんじゃないかなと思います。

最後に少し。

久し振りに書いた為に正直自信が無く、駄文だなと思うかもしれません。

もしかしたら、読んでいて若干の違和感を感じるかもしれません。

後、若干の捏造もあります。

以上の事をご理解いただいた上で読む事を推奨いたします。

8after（un－go　新十郎×因果）

新十郎side

「はぁ…。風守、あと残っている依頼はどれ位なんだ？」

「残っているのは、『屋上のキュウリの収穫』に『携帯の繋がりが悪い』と『彼女とよりを戻したい』と言う3つの依頼です」

まだ其れ位の仕事があるのか、と思いながら俺は溜息を吐いた。

何故こんな事になったのかと言えば、俺が刑務所での事件を解決し、暫くして刑務所から帰って来たかと思えば、待ち侘びていた依頼人達が押しかけて仕事の依頼をしてきたのだ。

大体携帯の繋がりが悪いだの屋上のキュウリの収穫だの彼女とよりを戻したいだの何なんだこの依頼の内容は。

携帯の方は風守が何とかしてくれると思うが、彼女とよりを戻したい為に態々探偵を使うなと心の中で愚痴った。

それに俺には他にも気掛かりな事があった。

「風守、因果の奴はどうしているんだ？」

「因果ならあれから部屋にずっと籠(こも)りっぱなしです。時々、「新十郎のバーカ」と呟いたりしていますよ」

因果は俺が刑務所で女性囚人の3人と仲良くしていたのがよっぽど気に入らなかったらしく、帰って来てからその事について色々言ってきた。

俺が何度も別天王の力でと説明しても、因果は『新十郎は僕なんかよりあの人達と一緒にいるのがいいんだ！』と言って話すら聞こうとせず、遂には『新十郎のバカ――ー！！」と怒鳴り付けて引き籠ってしまったのだ。

俺はそれ以来、因果とは一度も顔を合わせていない。

「因果の奴…あの3人とは本当に何でもないのに…まったく！」

このままじゃ埒があかないと思い、俺はもう一度因果と話をする為に因果の部屋に向かって行った。

「因果、入るぞ」

俺はドアをノックして言い、部屋に入っていった。

「…何の用さ？」

因果のピリピリした様子に俺は若干の居辛さを感じつつも、言葉を切り出した。

「因果…あの」

「用が無いなら出て行ってよ。新十郎は僕の事なんかどうでもいいんでしょ」

「違う。俺は…」

「出てって」

「話を…」

『出てってよ！！』

その言葉の後、暫く沈黙が続いた。

三人称ｓｉｄｅ

「因果…」

新十郎はそう呟きながら因果を抱きしめた。

「なっ、離して！離してよ！離し…」

「ごめん」

その言葉で因果は抵抗を辞めた。

「俺が悪かった。だから機嫌を直してくれ。お前がいないと辛いんだ…ッ」

それから暫くして、因果がポツリと呟いた。

「嫌だったんだ…」

そのまま因果は言葉を続ける。

「新十郎が…僕の知らない表情をあの3人に見せていたのが…嫌だった。別天王の力だと分かっていても…あんな表情を見せたのが…耐えられなかったんだ…」

そう言う因果の目からは涙がとめどなく溢れていた。

「ねぇ、新十郎」

「何だ？」

「僕の事、好き？」

「当たり前だろ。お前の変わりなんか何処にもいないからな」

「じゃあさ…落ち着くまでしばらくこのままでいさせて」

「…構わない」

そのまま2人は今の状態のまま、時間が経つのを待った。

数日後

「新十郎〜！」

そう言ってはしゃぐ因果は普通の子供のようだった。

「因果、そう急ぐなって」

「だってデートだよ！デート！僕にとっては嬉しい事なんだよ！」

そう言いながら因果はどんどん進んでいく。

（結局自分は因果にはつくづく甘いな）

そんな事を思いながら、新十郎はまた足を進めていった。

８ａｆｔｅｒ（ｕｎ－ｇｏ　新十郎×因果）（後書き）

久し振りのｕｎ－ｇｏ小説でした。

私自身、『ｕｎ－ｇｏ』８話を見終わった後、ふと「新十郎はあの依頼を全部こなしたのかな」と「因果は刑務所での新十郎に対してどう思ったのか」と言う二つの疑問を思い、自分なりに考えた結果がこの話でした。

タイトルの『８（エイト）ａｆｔｅｒ』は『８話の後日談』と言う意味が込められています。

因みに、あの後残った３つの依頼は因果の協力もあって無事に片付きました。（それ以外の依頼は新十郎と風守で）

最後に、作品の方を読んでくれて本当に有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7585x/

交差箱のハーモニー

2011年12月28日23時56分発行